

展示事業と調査研究に関する相関表

館名: 国立西洋美術館

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
14	共催展	「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」	14.3.5 ~ 6.16	スペイン美術を中心とした近世宮廷美術の調査研究	<p>・16, 17世紀のスペイン王家であったハ布スブルク朝と18世紀のブルボン朝の美術、19世紀の市民的な近代美術を対象せしめることで、美術受容者の要求がどのように作品制作に反映されるかを明示することができた。</p> <p>・さらに、出品作品がどのような形で発注され、スペイン王家のコレクションの中でどのような位置づけがなされていたかを調査することによって、君主の宮廷と美術制作の具体的な関わりについて具体的な認識を提示することができた。</p> <p>・本展では、単にペラスケスやゴヤといったスペイン美術の名品を出品するのみならず、これにスペイン王家の収集した、ティツィアーノやルーベンスらによるイタリアおよびネーデルラント絵画が対置された。宮廷を舞台としたこれらの画家たちの交流形態を調査し、その様式を比較対象することで、国際的な美術センターとしての宮廷の意味と、それが具体的な作品制作にどのように反映されたかを明らかにすることができた。</p> <p>(担当: 田邊 幹之助)</p>	読売新聞社
14	版画作品展	「平成11-13年度新収版画作品展」	14.3.5 ~ 5.26	作品購入に関する調査研究	<p>・毎年継続的に購入している西洋の版画作品から、これまで展示する機会のなかった作品74点をまとめて公開した。これによって鑑賞者は、国立西洋美術館が収集に努める作家や時代などを知ることができた。</p> <p>・作品購入のためになされた調査は、購入調書としてまとめられているが、作品公開の際にその知見やデータは今後も重要な第一資料となり活用される</p> <p>(担当: 佐藤 直樹)</p>	
14	教育プログラム	「Fun with Correction '02 手と心-モネ・ドニ・ロダン」	14.6.18 ~ 9.1	美術館教育に関する調査研究	<p>・当館の所蔵作品を様々な視点から紹介する継続プログラムとして実施している本企画において、今年度は当館が複数の作品を所蔵しているロダン、モネ、ドニという作家を取り上げることによって、時間とともに変化するアーティストの手(表現方法)と心(意図)の関係を来館者自らが考える機会を提示した。</p> <p>・作家が考え(意図)を形にして表わすとき、重要な要素となる材料・技法について、当館のロダンの鋳造技法の解説パネルや、描画材(顔料、絵具、筆、支持体)に関する資料も合わせて展示することによって、作品や作者の表現に関する理解を深めるよう促した。</p> <p>(担当: 寺島 洋子)</p>	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
14	自主企画展	「大英博物館所蔵フランス素描展 - フォンテーヌブローからヴェルサイユへ -」	14.7.9 ~ 9.1	フランス近世素描に関する調査研究	<p>・大英博物館所蔵のフランス近世素描を調査し、16-18世紀の101点を選び展示した。フランス王フランソワ1世が1530年頃からイタリアの有名画家であったロッソやブリマティッショらを招聘しフォンテーヌブロー派と呼ばれるようになる。彼らの素描で展覧会を始め、続く17世紀のフランス王立絵画彫刻アカデミーの素描、また18世紀のフランス宮廷文化の素描を巡ってみせた。</p> <p>・大英博物館の版画素描コレクションは200万点を数えるが、これまで1,500点を数えるフランス素描に関して十分な調査はされておらず、今回の展覧会で初めて研究対象となった。カラー図版による出版も初めてのことである。展覧会のカタログのテキストは全て日本人研究者によるものであり、英語版も出版されたことによってその水準が世界的にみても高いことが示された。</p> <p>(担当:佐藤直樹)</p>	
14	共催展	「ワインスロップ・コレクション展 - フォッグ美術館所蔵19世紀イギリス・フランス絵画」	14.9.14 ~ 12.8	19世紀の象徴主義的美術に関する研究	<p>・寄贈者であるワインスロップ氏の遺志により、ハーヴィード大学以外では展示されないことで知られたコレクションの初公開展である。出品作品の選択に当たっては、3700点に及ぶワインスロップ・コレクションを精査し、同コレクションの特徴がもっともよく示される19世紀イギリス、フランス美術を紹介することとした。出品作品のすべてがこれまでほとんど展覧会に出品されていないこともあり、各作品解説の内容はもちろんのこと、文献、来歴などの膨大な量の基本情報をも整理、公開するという学術的にも貴重な展覧会となった。鮮明なカラー図版は、本展図録により初めて可能になったものも多い。</p> <p>・ワインスロップ・コレクションに含まれる19世紀美術のうち、バーン=ジョーンズやモローなど、写実主義や印象派とは一線を画す画家たちの作品を中心に、アンダルやロセッティなどの代表作を含め、86点を展示了。全体構成は「過去と東方」「神秘と顯現」「誘惑と堕落」「象徴と偶像」とし、同じ作者や題材によってグループ化するのではなく、同じ作者や題材を異なったカテゴリーに変化させることにより、ひとつのイメージがもつ表現の幅を示すことができた。</p> <p>・図録の論文として、ワインスロップ氏自身とそのコレクションの形成と継承が論じられ、20世紀前半のアメリカにおけるコレクションズムに関する研究に寄与する内容となった。</p> <p>(担当:大屋美那)</p>	東京新聞

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
14	版画作品展	「クリシェ・ヴェール - コローとバルビゾン派の版画 - 」	14.9.14 ~ 12.8	クリシェ・ヴェールと19世紀版画史の研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国立西洋美術館に所蔵される、クリシェ・ヴェールという技法による版画を調査し、その結果、それが発明されたばかりの写真術と深く関わって成立した技法であることが明らかとなった。また、銅版画を参考出品することにより、クリシェ・ヴェールが銅版画と写真の両方の特質を有することを明示することができた。</li> <li>・複数の版画家による作品を同時に展示することにより、版画家による表現の方法の違いを示すことができた。 (担当:渡邊 晋輔)</li> </ul>	
14	版画作品展	「受難伝 - 国立西洋美術館所蔵のドイツ・ルネサンス版画による - 」	15.3.4 ~ 5.25	受難伝を主題としたドイツ・ルネサンス版画の研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国立西洋美術館に所蔵されるドイツ・ルネサンス版画を、受難伝という主題に沿って体系に調査し、その意味を明らかにすることができた。</li> <li>・版画という近代的な媒体によって受難伝という中世以来の伝統的な連作が取り上げられる際、テキストと組み合わされた大小の寸法の木版画、高度な美術的質を要求されるエンゲレーヴィング、実験的なエッチングといったさまざまな表現形式に応じて、主題の選択と様式にどのような変化があらわれるかを明示することができた。</li> <li>・連作形式によって表わされる受難伝と、受難伝から派生した単独像としての版画作品の関連を明らかにした。 (担当:田邊 幹之助)</li> </ul>	
14	小企画展	「織りだされた絵画 - 国立西洋美術館所蔵17 - 18世紀タapisserie」	15.3.18 ~ 5.25	17、18世紀フランス、フランドル・タapisserieの調査研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旧松方コレクションに由来するタapisリーを社団法人糖業協会から1点、日本興業銀行(当時)より5点の寄贈を受けたことを契機に、そこに当館所蔵のゴブラン織タapisリー当該作品の本格的調査及びその寄贈者への顕彰披露をかねて小規模ながらも展覧会を実現できたことは有意義であった。</li> <li>・5点の寄贈タapisリーはそれまで製作地や描かれた主題等が不明なままであったが、本展実現に向けた各担当者の努力による詳細な調査により、古典に基づく物語主題や風俗主題を特定することができたことは美術史研究上有意義な結果を導き出すことができ、それは展示及びカタログに直接に反映されることとなった。</li> <li>・寄贈作品中の1点(姉たちに贈り物をするプシュケ)には、ほぼ1年をかけて修復・洗浄が施され、その過程での調査および成果も展覧された。</li> <li>・寄贈作品6点が全て旧松方コレクションに所属していた事実は、このコレクションにおいて工芸作品が少なからぬ重要性をもっていたことを示し得たという点において、本展は国立西洋美術館として非常に有意義な調査研究発表の場となった。 (担当:高橋 明也)</li> </ul>	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
15	自主企画展	「ドレスデン版画素描館所蔵 ドイツ・ロマン主義の風景素描」	15.8.12 ~ 10.5	ドイツ・ロマン主義の調査研究	<p>・ドレスデン版画素描館に所蔵されるユリウス・シュノルの「風景画帳」は、シュノルガイタリア滞在中に描いた風景素描から名品115点をまとめたものだが、ここから59点を選び、日本で初めてこの素描帳を展示した。さらに、シュノルと関係の深かったドイツ・ロマン主義の作家たちの素描を現地で調査し、35点を選び展示し、彼らの相互の影響関係を視覚的に明らかにすることができた。</p> <p>・日本でドイツ・ロマン主義が取り上げられるのは珍しいためか予想を超える入場者があり、日本にロマン主義の根強いファン層のあることが確認できた。</p> <p>(担当:佐藤 直樹)</p>	
15	教育プログラム	「Fun with Correction '03 ココロのマド-絵のかたち」	15.7.1 ~ 8.31	美術館教育に関する調査研究	<p>・国立西洋美術館の所蔵作品を様々な視点から紹介する継続プログラムとして実施している本企画において、今年度は西洋絵画の歴史を、絵画作品の形体という視点から紹介した。</p> <p>・絵画は基本的に矩形であるという一般的な認識に対して、その形態のヴァリエーションを紹介することによって、絵画(美術)の目的や役割の変遷を示した。</p> <p>・また、特定の形態の中で、画家はどのように画面を構成するか、といった表現方法の多様性を示唆することができた。</p> <p>(担当:寺島 洋子)</p>	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
15	共催展	「レンブラントとレンブラント派 聖書, 神話, 物語」	16.9.13 ~ 12.14	レンブラントと17世紀オランダ物語画の調査研究	<p>・レンブラントのような西洋美術を代表する画家の場合、いくら開催する場所が西洋から離れた日本であるからといって、もはや「文化交流」という名目だけで作品を借りることは不可能である。レンブラントのどのような側面に焦点を合わせ、どのような内容の展覧会をおこなうのかが明確にされない限り、欧米諸美術館の理解をうることはできないからである。</p> <p>・この展覧会では当初からこのような視点に立ち、欧米の研究者たちと協議を進め、「物語画」と「レンブラント派」の2点をキーテーマとして展覧会を企画することが決められた。19世紀における17世紀オランダ絵画の再発見以来、この美術は「写実」と「日常」のふたつを根本原理して生まれたものであるとの認識が広まった。しかし、17世紀オランダ絵画にも物語画(物語的主題をもつ絵画)は少くないし、また、この時代を代表する画家であるレンブラントとその後継者たちは、むしろ、物語画を中心に制作を進めていた。その意味で、17世紀オランダ絵画全般にわたる再検討ということをも視野に入れ、他方、レンブラント派をひとつのケース・スタディとして物語画の問題に切り込んだこの展覧会は、学術的にもきわめて意義深いものであった。同展のカタログや同時に開催された国際シンポジウムの報告者(英文)は内外で高く評価された。他方、このように学術性の高い展覧会ではあったが、同時に、本展ではレンブラントの画家としても魅力も充分に伝えることのできたものと確信する。</p> <p>・出品交渉に入る以前から、展覧会の内容についてレンブラント研究の頂点に立つ研究者たちと長きにわたって協議を続けた結果、同展の開催にこぎつけたものであり、展覧会自体の準備期間は通常の4年程度ということになるが、そのような前段階の交渉を含めると、この展覧会を実現するには7、8年の年月が必要であった。</p> <p>(担当:幸福 輝)</p>	NHK / NHKプロモーション
15	版画作品展	「ジャック・カロの版画 - 17世紀フランス、イタリアの人々、宫廷、戦争 - 」	16.9.13 ~ 12.14	ジャック・カロの版画に関する調査研究	<p>・所蔵するカロの銅版画420点のなかから、代表作(「レダの攻略」、「戦争の悲惨(大)」、「狩り」などを含む64点を展示了した。購入以来長く公開してこなかった作品群であったが、これを期に作品の刷りや保存状態を確認し、基礎資料を収集、調査、公開することができた。</p> <p>・展覧会としては、イタリアに渡って銅版画の技法を修得し、宫廷や市井の人々の生活をモチーフとして見い出した時代の作品と、故郷の町ナンシーに戻った後の時代の作品に分け紹介した。これにより、フィレンツェやナンシーで宫廷の庇護を受け肖像画や祝祭の光景などを描いた時代と、乞食や役者といった社会の下層の人々や彼らを襲う貧困や戦乱を描いた時代の作風が対比され、カロ芸術の二面性があらためて浮き彫りとなった。</p> <p>(担当:大屋 美那)</p>	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
15	共催展	「ヴァチカン美術館所蔵古代ローマ彫刻展 生きた証 - 古代ローマ人と肖像」	16.3.2 ~ 5.30	18世紀における「古代の受容」に関する調査研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エトルリア、共和政ローマ、帝政ローマ、キリスト教ローマという歴史的に連続性を持ちながらも文化的に大きく異なる時代の作品を展示することになったため、作品そのものに刻まれているエトルリア語の碑文読解、共和・帝政期のラテン語およびギリシャ語、キリスト教時代のラテン語・ギリシャ語、さらには教会ラテン語等の複雑な古典言語の調査研究は各作品の背景についての正確な理解と解説に直接的に反映された。</li> <li>・個々の作品の現在の保存状態や形状を理解するためには、ヴァチカン教皇とローマの遺跡発掘史に関する文化史的背景を研究する必要があった。それによりキリスト教文化の中核におけるルネサンス以降の異教の文化財の収集文化の研究に加え、初期キリスト教時代における敬虔なキリスト教信者たちの遺品や聖遺物等の崇敬のあり方を1セクション加えて紹介することができた。</li> <li>・展示方法や環境整備に絵画とは異なる配慮及び技術が必要とされる大理石彫刻およびブロンズ彫刻などの物理的な調査は、地震等の自然災害による作品破損や人的被害等のリスクマネージメントを意識した展示構造物の設計及び耐荷重バランスによる作品配置等に反映され、免震装置の適切な導入や作品固定方法の選択に大いに寄与した。</li> </ul> <p>(担当:高梨 光正)</p>	NHK / NHKプロモーション
15	版画作品展	「ファウストとハムレット:ドラクロワ - ロマン派石版画の魅力」	16.3.2 ~ 5.30	ドラクロワとロマン派石版画に関する研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドラクロワが、ドイツの作家ゲーテの小説『ファウスト』とイギリスの戯曲家シェークスピアの作品『ハムレット』を展示することによって、ドラクロワの芸術ならびにフランスのロマン主義の文化が、ドイツやイギリスの古典との交流のもとで成立していたことを明らかにすることができた。</li> <li>・ドラクロワの連作版画について、その物語表現の構成の様相について明らかにすることができた。</li> </ul> <p>(担当:高橋 明也)</p>	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
16	自主企画展	「聖杯 - 中世の金工美術 ドイツ東部のプロテスタント教会所蔵作品による」	16.6.25 ~ 8.15	中世の金工美術、中世美術、およびその受容史に関する研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>· 1990年の東西ドイツ統一を受けて進展した、東部ドイツの教会美術研究の成果を明らかにした。本展に出品された作品のほとんどはこれまで発表される機会のなかった、この調査によって所在が明らかになったものである。</li> <li>· これまで展覧会という形では取り上げられることのなかつたヨーロッパ中世の金属工芸を、まとまった形で紹介することができた。</li> <li>· 神学者との共同研究という形をとることによって、教会美術の典礼における意味と機能を明示し得た。</li> <li>· ヨーロッパおよび日本の金工家の協力を得て、中世金工美術の技法的特質の調査し、その成果を提示できた。</li> <li>· 主題を聖杯に限定することで、その基礎形式に、ロマネスクから後期ゴシック時代にかけての時代様式がどのように反映されるかを明示することができた。</li> <li>· 聖杯の典礼学的な機能が図像的な装飾形体をどのように規定し、その規定が時代に応じてどのように変遷したかを明らかにし得た。</li> <li>· この展覧会の調査の一環として、西洋美術館では数年度にわたり、金属工芸の図案や見本として制作された銅版画を購入してきたが、これらの版画と聖杯を対置することによって、金工美術と銅版画の関わりに関する研究の成果を提示した。</li> <li>· 出品作品はいずれもルター派教会に所蔵され、今日に至るまでミサで使用されたものであって、その意味では近代における中世の教会美術受容に関する具体的な資料となっている。本展では、カトリックおよびルター派神学者の協力を得て、宗教改革以前に制作された出品作品が、プロテスタント教会においてどのように選択的に受容されたかを調査し、聖杯の中世教会における本来の機能と意味、プロテスタント教会における典礼形式の変遷、そしてそれに伴う教会美術の意味の変容を明らかにした。</li> </ul> <p>(担当:田邊 幹之助)</p>	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
16	教育プログラム	「Fun with Correction '04 ぐるぐるめぐるル・コルビュジエの美術館」	16.6.29 ~ 9.25	美術館教育に関する調査研究	<p>・当館の所蔵作品を様々な視点から紹介する継続プログラムとして実施している本企画において、今年度は美術作品ではなくそれらを展示している空間であるル・コルビュジエ設計による本館をとりあげることによって、美術作品と建築の相関関係を紹介した。</p> <p>・ル・コルビュジエが提唱した近代建築の5原則や、本館において実現した空間や照明の在り方などを示すことによって、ル・コルビュジエが抱いていた美術館建築に関する概念を紹介することができた。</p> <p>・通常は無意識のうちに感じている作品鑑賞における空間の果たす役割とその効果について考える機会を提供すると同時に、理想的な美術館とは何かをも考える契機となつた。</p> <p>・本館設立当時の関係者の協力を得ることによって、本館建設に関わる資料を整理し、その一部を公開した。また、当本館は世界に存在するル・コルビュジエ設計による美術館建築の稀少な例であることを紹介した。</p> <p>(担当:寺島 洋子)</p>	
16	共催展	「マティス展」	16.9.10 ~ 12.12	マティスにおける「課程」と「ヴァリエーション」の問題に関する調査研究	<p>・本展は、マティス作品における「過程」と「ヴァリエーション」の問題に焦点を当てた世界で最初のものであった。それによって、単に名品の鑑賞のために展示するのではなく、画家マティスの制作の様相を明らかにするとともに、作品の成立をめぐる問題を多角的示す深い内容の展覧会として構成された。</p> <p>・從来マティスは、一般的には「色彩の美しさ」を賞賛され、またその深刻さの見られない自由闊達な描写を評価されてきたが、実際の制作に当たっては、長い試行錯誤と綿密な計算に基づいてなされていたことが明らかにされた。</p> <p>・これらの問題を明確にするために、マティスの遺族や、海外の美術館や図書館などの研究機関に所蔵されている未発表の写真資料(作品の制作過程を記録したもの、生前の個展会場風景など)、手紙、電報、インタビュー、手記類、マティスの制作の姿を撮影した映像記録などを綿密に調査し、会場での展示パネル、モニター、カタログにおいて公開した。その多くはこの展覧会において世界で初めて公開されたものであった。</p> <p>・作品の多くは美術館などの公的機関には所蔵されておらず、そのため未公開の欧米の個人コレクションを調査しなければならなかった。その調査の結果として所蔵が確認された作品を本展において公開することができた。</p> <p>・展覧会は内外の専門家からも高く評価され、カタログおよびそのフランス語訳は、海外の研究者からも取り寄せの依頼が届いた。</p> <p>(担当:田中 正之)</p>	読売新聞社、NHK / NHKプロモーション

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
16	版画作品展	「オランダ・マニエリスム版画展」	16.9.10 ~ 12.12	オランダ・マニエリスム版画に関する調査研究	<p>・17世紀オランダ美術は日本でも比較的よく知られているが、その黎明期の美術についてはほとんど知られていない。1600年前後のオランダ美術は、しばしば「オランダ・マニエリスム」という名前で呼ばれることが多い。いわゆる、ラファエッロ歿後のイタリアで広まったマニエリスムと重なる部分をもちながら、そこに地域性が加わり、また、時代的なズレ(オランダのマニエリスムはイタリアのそれより約半世紀遅れて登場した美術である)もあって、イタリアのそれとは条件が大きく異なってもいた。展覧会では、このような観点となるだけ具体的に示すような展示を試みた。</p> <p>・当館の所蔵品、しかも版画だけで行なう展覧会であったので、本展では、まず、オランダ・マニエリスムという時代全体のタームの意味を理解してもらうこと、どのような特徴があつたかを認識してもらい、次いで、この時代の版画の重要性を理解してもらうことを第一に考えた。一般には馴染みのない「複製版画」というものの歴史的意味や写実主義と結び付いている17世紀オランダ美術の出発点に、このような反写実のマニエリスムの美術があつたことを示した点に大きな意義があつたものと考える。</p> <p>(担当:幸福 輝)</p>	
16	共催展	「ジョルジュ・ド・ラ・トゥール - 光と闇の世界」	17.3.8 ~ 5.29	ジョルジュ・ド・ラ・トゥールと17世紀フランス絵画に関する調査研究	<p>・フランスにおいては、その作品が国宝級のものと見なされている17世紀の画家ラ・トゥールの作品を展示する日本で初めて紹介、展示する展覧会となった。またラ・トゥールが活動の地とし、また当時は一公国として独自の文化圏を形成していたフランス・ロレーヌ地方の文化の状況を初めて日本に紹介するものとなった。</p> <p>・平成15年度に西洋美術館が購入したラ・トゥール作品(聖トマス)のオリジナルの展示状況を調査することによって、その状況を展覧会において関連作品とともに再構成した。</p> <p>・ラ・トゥールのオリジナル作品とコピーとを並列的に展示することにより、美術の歴史におけるコピーの意義と問題とを明らかにした。</p> <p>(担当:高橋 明也)</p>	読売新聞社
16	版画作品展	「マックス・クリンガー版画展」	17.3.8 ~ 5.29	マックス・クリンガー版画の物語表現に関する調査研究	<p>・本展は、マックス・クリンガーが連作版画において表現した「物語表現」に焦点を当てたもので、そのため彼がイメージによる描写を試みた「物語内容」を綿密に調査する必要があった。その調査の結果得られた「物語内容」は、作品とともにパネルとして展示され、クリンガーの物語表現の様相を明らかにすことができた。</p> <p>・文章による「物語内容」と実際の作品とを並列して展示し、相互参照を可能とすることによって、クリンガーの版画における「絵によって物語る」際に、彼がどのように想像力を膨らませ、またどのような物語構造を使用していたのかについても明らかにすことができた。</p> <p>(担当:田中 正之)</p>	